

積善山(369.8M)・日の峯山(147.8M)・由布岳(1580M)

まだ幾分冷える日もありますが、以前の厳しい冷え込みから比べると、随分暖かくなりました。前報(1月末)から色々な事情で、登山は途絶えておりました(健康上の問題ではなく、体調は比較的良好に推移しております)。

その反動ではありませんが、4月13～16日の4日間に、大小3つの山に登りました。第1は「積善山」、その次は「日の峯山」、最後は「由布岳」です。

第1弾の積善山(せきぜんやま。名前が良い。岩城富士の異名あり。標高369.8M)登山は、読売旅行が企画した「絶景しまなみ海道ウォーキング」(全5回)の第2回分で、4月13日(土)でした。我らのパーティは、私を入れて地元山の会のメンバー3人です。

バスは、我らを朝6時に最寄りの厚狭駅で拾い、更にあっちこっちで乗客を拾って行き、10時過ぎにやっと山陽自動車道へ乗り、「しまなみ海道」に入り、その途中で降りた。愛媛の小島(岩城/いわぎ島)へ渡り、11時半頃、積善山のふもとの駐車場に到着。

私らはそこから歩いて、桜で有名な積善山の頂上を目指します。道の脇のこの島の名物・青レモンの木や島の歌い文句の3000本の桜を愛でながら、約5KMの道を登って行きます。その帯状の桜の景色は、「天女の羽衣」と称されたり、「岩城の桜を一度観たら、一年長生きができる」と言われたりしていると。時期が良ければ、桜、桜でしょうが、ソメイヨシノは残り少なで、数はそれ程ありませんが八重桜が満開。桜に代って、ピンクのミツバツツジが私らを迎えてくれました(※088)。

ウォーキングの開始が11時半過ぎで、このまま行くと頂上ではお昼をとくに過ぎるので、途中、道脇の自前休憩所で、ツアー支給の2段弁当を肴に、これも自前持参のビールで喉を潤しました。

再び、登りを加え、最後はアスファルト道はずれ、急登を登り頂上三角点に到着(13時半頃)。

360度の大パノラマ展望で、瀬戸の島々とそれらを繋ぐしまなみ海道の橋々、晴天に映える青い海の展望を堪能しました。

各地から読売ツアーバスが来ていて、上りも下りも読売旅行のバッジを着けた人が殆どで、まるで貸切状態でした。途中、「今日は頑張った、頑張った。」「今朝(6時前)の地震は少し強かったけど、物は倒れなかった」とか話してくれた大阪から来たという80歳の御婦人にも会いました。

集合時間（15時半）までの余裕時間が欲しいと思い、少し急いだ感じで降りて行きました。

集合場所には地元の特産物や飲食物を売っており、私は、口には「さくらアイス（桜色のバニラソフト）」を、お土産には珍しい名前の「安政柑（安政のいわれを聞くも？。その時期の開発品か）」を買い求めました。

もちろん帰りもバス。バスは、防府で高速を降りて、お客さんを降ろしつつ走り、終点「厚狭駅」には20時頃に到着したのです。帰宅後チェックの歩行数は、13998歩と結構の数字でした。

第2弾は、14日（日）、地元の山・日の峯山（ひのみねさん。標高147.8M）です。我が家から歩いても頂上まで30分位。

この山の頂上に小さな神社のお社があって、この日は、年一回の例祭の日でした。私は、近隣の部落順で廻って来た神役（じんやく。神社の宮司さんを先導する役で、お務めに必要な器具類をふるい、かたい、おおきいカバンに紐を通して背負って行きます）にあたり、朝7時過ぎに、宮司さんを迎えに行き、その山に登り、宮司さんのお務めに同席しました。一旦、家に帰って、また14時頃にお迎えに行きました。結局、その日この山への2回登山です。

日峯山は、もともと烽火（のろし）を上げて伝令していた山ですが、そのうち、頂上に大きい五本の松を植え、これを含め近隣の3つの山が、漁師さん達の海の見印でもあったとのこと。目印→目の神様にもなったということです。海から良く見えると言うことは、山からの眺めも良かったようですが、今は残念ながら、山頂付近の雑木が大きく繁って視界が思うようありません。昔は、このお祭りの時は、お店も出るような賑わいだったとかですが、今では、毎年20人程度の御参りに終わっているそうです。この日の歩行数は約2000歩／回×2回と割りと穏やかでした。

第3弾は、16日（月）、九州・大分の由布岳（標高1580M）登山でした。私の町の海辺や山からも、天気の良い日にはこの特徴ある山容（豊後富士）が見えるので、一度は登ってみたいと思っていた山です。この山は、日本200名山の一つで、例の深田久弥氏が、ここを日本100名山に入れなかったことを後悔した山です。

こちらも、地元山の会の友達3人で、マイカーで行きました。

前日は、厚狭から由布岳の麓の湯布院への移動です。少し早目に厚狭を出て、国東半島の付け根にある城下町の、坂の町・杵築市内を観光。11時半からの

昼食付き、それが終わって、ボランティアガイドさん付き観光地巡りのミニ観光ツアーでした。昔のご家老さまや明治の大物事業家等の御屋敷、海岸に建つ全国一小さいという杵築城、更には趣味の会の作品ギャラリー等をゆっくり、のんびり見学しました。静かな町にマッチして、優雅に街並みの絵を描いている人達もいました。

あくる日は、宿の朝食を終わると足早に由布岳正面登山口へ。ここは「九州横断道路（通称、やまなみハイウェイ）」の途中で、道のすぐ脇に駐車場、道を挟んで登山口があります。ここで標高は既に780M。頂上まで残るは800Mです。登山装備をしていたら、30歳位と思われる女性が大分ナンバーの車で、私達の車の横に駐車。いかにも身の軽そうな感じで、由布岳登山160回位とか。何となく好きなんですと話してました。

準備運動後、由布岳と標識を入れて記念撮影し、9時前に登山開始。

由布岳登山は、豊後富士の異名の通り、富士山に似た裾野を大きく広げ、頂上は、これもご存じの通り、二つの峰を、まるで二こぶラクダのように雄々しくそびえています。ごくごく山裾の方は、やっとな若草が生えてきた草原（牧草地）ですが、その少し上部は枯れた色合いの樹木帯になっていますが、点々と散らばる頬紅のように淡いピンクの山桜がアクセントとなっていました。緩やかな草原の斜面を登り、振り返ると、真後ろに由布岳の標識、駐車場、少し右の方にはくねくねした「やまなみハイウェイ」の道筋が見えます。10分も登れば、樹木帯に入りました。「新緑」真っ盛りかと予想していましたが、ツツジの木などは、まだ葉が初々しく、少なく、今から育ちゆくと言う感じでした。

連日の登山のせい、昨日のアルコールの残りのせい、今回のにわかリーダーがいつもの年長リーダーより若くピッチが少し早いせい、結構汗が出る。道脇には薄紫やピンクや真っ黄色のすみれみたいな花が登山中ずっとありました。そう言えば、これも名前が解りませんが、例のコマクサの形をした黄色い花も見かけました（※098）。いずれも小さいけど、色んな花が疲れを癒してくれます。

1時間弱登ったら、合野越えというポイントに到着。ベンチもあり当然休憩。標高で言えば、1000Mちょっとで、登山口より約200M登ったところです。

石ごろごろの道を少し行くと、10時過ぎに樹林帯を過ぎ視界が開け、樹木を越えて遠くの景色が眼に入ってきました。見える山なみは、何度か登ったくじゅう連山。

更に登ると、湯布院の街が見えてきました。湯布院の地に詳しい山さん（と、しましろう）が、あのあたりが「JRの駅」、岡の向こうの森の付近が「金鱗湖」とか教えてくれました。

道は勾配がきつくなり、石も大きくなった感じで、登りづらいところや段差の大きいところでは、3人共ことごとく「よいしょ！」と、自分に気合を入れながら登る。登山開始後、約2時間半で（11時半過ぎ）、マタエという東峰と西峰の分岐点に到着。左手（西峰）には、くねくねとした道のきらきらとしたクサリ場を登っている人の姿も見えます。

私達は、進路を右手に取り、割りと素直な東峰に向かう。何度か前に手をつけて登る等、まだまだ岩だらけの急勾配は続きます。ロープを添えてあるところもありました。12時頃、遂に頂上に。岩など風よけもないところでは、帽子が飛ばされるかも、と言う位の強い風でした。

別の8人グループの人に、私達の登頂記念写真を撮ってもらい、岩陰で風を避けてランチタイムオープン。お弁当は、今朝コンビニで買って来たものです。ビールは、宿で冷やしておいたアイスノンと一緒に入れて来る等の努力をし、出来る範囲で暖まらない工夫してきたもの。3人で乾杯のあと、これも持参のおつまみと弁当のおかずが肴です。ランチタイム終盤には一口コーヒーも飲んでたりして、小一時間経過。

改めて、少しガスが掛かってきた360度の視界を展望し、下山に掛かる。登って来た道を折り返す訳です。マタエまで15分位。さすが著名な山、団体客とか、まだまだ登って来る人がいます。1時間程下ると、トンカチ、トンカチと言う音がしていましたが、一人のおじさんが道の土砂崩れ防止杭を打っていました。「お疲れさん」とか「有難うございます」とか言って下り続ける。

更に30分ほどで、合野越えに到着。ここから下山道を少し変え、山裾にこぶ状にこんもりとした草山の「飯盛ヶ城（いもりが城）」に登る。合野越えからの標高差は50m程度と思うけれども、勾配がきつくてこたえました。しか

し、ここから振り返って見る由布岳の山容は素晴らしかった（※173）。16時頃、登山口に無事到着。

結局、登り降りとも、それぞれ3時間ずつ掛かった。

途中、休憩を挟んで、一路厚狭へ車を進めたのです。

由歩岳登山の日の歩行数は、約15500歩。今回の山では、やっぱりここが一番厳しいものでした。

（今回の報告は、やや長くなりました。お付き合い有難うございました。）

暖かさの巡ってきつつあるこの時期、幾つかの風情の山を楽しみました。

山口／古賀

